

# 身延山御書を拜して

北 嶋 精 學

あゝ初夏の朝風、何たる心地の善いことである  
ふ、見渡せば四方の野も山も緑の雫滴らんとして  
居る、『綠陰幽草勝花時』とは蓋し詩人のみの誣稱  
ではあかろふ、予は此の快感に打たれつゝ、聖祖  
の御廟に詣てまつり身延山御書を拜讀して、御隱  
樓御當時を追懷して、轉た感涙禁するを得なかつ  
た、此の御書中弘決の例を引き玉ひし中に

昔毘摩大國に狐あり獅子に追はれて逃げける  
が水も無き渴井に落ち入りぬ、獅子は井を飛び  
越ゑて行きぬ彼の狐井より上らんとすれども深  
き井なれば上ること得ざりき既に日數を經る程  
に飢死なんぞす其時狐唱へて云く『禍ヲ哉今日  
苦所通便當ニ歿ニ命ヲ於丘井ニ切萬物皆無常ナリ恨  
クハ不<sup>レ</sup>サルコトヲ以<sup>レ</sup>身飼ハ獅子ニ南無歸命十方佛表ニ知<sup>シ</sup>タ  
マ<sup>メ</sup>我心ノ淨クシテ無<sup>レ</sup>レコトム

どの文がある、一寸考へると如何にも滑稽な事

の様だが、熟讀玩味したならば、此の狐の語の中  
には無上の深理が含まれて居るのである、彼の狐  
が一度は命を惜んで逃げたけれども正に餓死せん  
とするに及んで、一切萬物皆無常である斯くして  
徒らに餓死する様であつたから初めから此身を  
獅子の飼食に與へるのであつたのに、と云つた語  
の中には確かに、我等に向つて醉生夢死を誡めて  
居るのでは無かるふか、生を此世に受けし者貴賤  
貧富の別なく、一度は是非死ぬのであつたからば  
其死をして意義ある死としたいものである、『あざ  
けちや疊の上の野たれ死に』では困る、是れと反  
對に『身の果てを錦にのこす蠶哉』であつて欲し  
い、聖祖が四條金吾へ與へられた御消息に  
百廿迄生きて名をくたして死せんよりは、生  
き一日ありとも名をあげん事こそ大切なれ、中  
務三郎左衛門の尉は主の御爲にも佛法の御爲に  
も世間の心根もよかりけり、と、鎌倉の人々  
の口に歌はれ玉へ、藏の財よりも身の寶積れた  
り身の寶よりも心の寶第一あり、

と御訓誠成されて居りますが、四條氏も常に此の御聖訓を色讀されて居たから、知行歿收せられとも如何なる迫害に遭遇成されても確固として動じ玉はず、竜口法難の如きは共に聖祖に殉ずるの覺悟をせられて末代信者の龜鑑と成り玉ふたのである、而れは我等も徒らに醉生夢死して渴井の狐に劣る如き行動があつては成らぬ、而して何處迄も献身的の活動を續けていつたならば、それが難て意義ある死に對するの用意である (終)

## 如何にして進むべきか

福 島 瑞 岳

明治天皇の御歌を拜誦すると其中に『黒金の的射し人もあるものを貫き通せ大和心を』といひ『ことかくて治まる世にも民の爲思ふ心はやすむ時あり』と仰せになつてあります私は此の御作を拜誦する毎に肺肝に泌みこむのです有史以來殆んど比類ない英主にましまして又比類のない鴻業を立てさせられた我が日本國のみにかと申すと、さうで

はない『四方の海みなはらからと思ふ世になど浪風の立ちさわぐらん』と仰せにあつて世界萬國の事までも御心配なされてある事は私が今新しく申すまでもない斯の如く吾々をして志操を堅固にすべきことを示されてある吾々國民たる者は深く思ひをこゝに致さねばからぬ實に今日の如く世界各國から對立して各方面に烈しい競争が續いて居るではないか今此の時に當つて老幼を問はず男女を論せず苟くも我國民たる者はしつかりと覺悟の臍を固めて世の中に立ち進まなくてはならぬ若し互の心に少しでも緩みかあつたならば國家の前途が氣遣はしいのみならず吾等も決して安穩には居られぬ小い成功に安心して驕慢の心を生ずる者と小い失敗に力を奮はれて絶望する様な者は『生きて不生産的動物たらんより寧ろ死して社會の經濟を妨げざるに若す』と叱して然るべきではいか此に於てどうしても必要を物があるそれはなんであらう即ち精進と忍耐である世の中には随分進む事のみを知つて忍耐の乏しい人がある又忍ぶ事の